

朴正熙と農村復興運動

崔 吉城

研究に大きいヒント

「地方創生」の話を知ると、朴正熙大統領の「セマウル運動」を想起する。「セマウル運動」は朴正熙大統領が主導して行った運動で、それによって漢江の奇跡を成し遂げたと言われるものである。朴正熙大統領は軍事クーデターを起こし権力を握り、今では古くなった「新しい村」「セマウル運動」を行った。テレビなどマス・メディアを最大限に利用しながら豊かな国作りの夢を国民に与えた。

はじめは農村開発運動として経済的収入増大などを強調したが、精神革命も必要とした。一次経済開発計画(1962-66)と二次経済開発計画(1967-71)において経済成長に自信を得た朴大統領は近代化の不均衡を突破するためには農民の自覚が必要であると考え、三次経済開発計画としてセマウル運動を起こした。経済的収入増大などを強調したが、結果的に精神革命になったのである。

朴正熙大統領がセマウル運動を始めたきっかけは何だったのだろうか。当時、独創的だと言われ、あるいは北朝鮮の千里馬運動に対応するものだとも言われた。また農村振興運動を想起させるなど色々な説があった。朴大統領がセマウル運動をどういう契機で始めたのかはまだ不明である。私はターナー氏が経済発展の点で評価をし、セマウル運動が日本帝国の農村振興運動に似ていると指摘している¹ことから大きなヒントを得た。

セマウル運動と農村振興運動の接点

私は朴正熙氏が大邱師範学校で修学、1937年から閔慶公立普通学校教師として3年間勤めたことはもちろん知っていた。当初はただ日本植民地時代に師範学校の教育を受け、陸軍士官学校を卒業して軍人として生きてきたことが政策などに生かされていたのではないだろうかと考えた。しかし私は日本植民地研究を始めてから、セマウル運動が日本からの影響ではないかともっ

と深く考えるようになった。そして彼が農村振興運動に関与していたのかどうかということが私の最大の関心事になった。それは私がセマウル運動と農村振興運動の接点を探していたからであった。朴氏がその農村振興運動の指導教育の体験から、セマウル運動を構想し展開したのではないかという仮説を私は持っていたのである。

朴正熙大統領は 1917 年慶尚北道善山郡亀尾邑上毛里 117 番地で生まれ、日本名は岡本実、通名は高木正雄である。しかし彼はほぼ「朴正熙」という名前で一貫した。農村振興運動が始まった 1932 年に亀尾普通学校を卒業し、1937 年大邱師範学校を卒業。1937 年から 3 年間聞慶公立普通学校教師として勤めた。1940 年満州新京の軍官学校 2 期生として入学し、1944 年に東京座間の陸軍士官学校を第 57 期生として卒業した。陸軍少尉に任官され松山第 14 連隊に配属されて、後に満州国軍第八旅団の小隊長をした。

教育者から軍将校への経歴から、私は彼の人生観、革命思想などを推測していた。私には彼の言動などから軍人であっても師範学校卒の「先生」の教師像が強く感じられた。日本の教育システムで受けた教師としての、すなわち師匠としての態度を一貫したようである。清廉潔白な教師のような人格を基本としていたということが出来る。彼は他の韓国の大統領のように親姻族による不正の問題は起こしていないし、その点を国民は信頼していたと、私は感じている。

彼は日本を非難したことはなかった。フランスの民権革命、中国の孫文革命、「日本の明治維新」、トルコのケマルパシヤ革命、イギリスの産業革命など我々に与えてくれるものは大きいと述べている。「明治維新の時の志士のような覚悟で祖国再建に努めており、そのために明治維新を研究している」「私は日本陸軍士官学校出身であり、強い軍隊を造るには日本式教育が一番良い」とも言った。日本の軍国主義精神、特に国家改革論という革新派将校たちが抱えていた昭和維新(2・26 事件) 思想の影響を受けたとも言われている²。

私はその脈絡からセマウル運動と農村振興運動の接点は日本、つまり朝鮮総督府の農村振興運動との関係であると確信するようになった。それは彼が慶公立普通学校の教師の時に農村振興運動を指導した経験があったという朝鮮総督府の農村振興の資料を見たからである。特に「聞慶更生農園」(身北更

生農園)の資料をみたときからである。

聞慶公立普通学校へ

1995年その資料を見た私は、早速翌年に聞慶公立普通学校を訪ねた。そこは当時慶尚北道農道訓練所の中の「聞慶更生農園」(聞慶郡聞慶面下里)と「身北更生農園」(同郡身北面葛坪里)が経営主体の指定学校だったからである。その更生農園卒の生存者の鄭玉振氏に会った。彼へのインタビューによれば、韓国人の趙先生が主に農園で生活しながら指導をした。朝早く起きて大声を出すことから、一日の日課を始めた。主に特殊作物やスイカ、さつまいもなどを栽培したが、啓蒙することが目的であった。主に昼間は労働をし、夕方に講義が行われた。講師は聞慶郡の尹郡守をはじめとして豊田校長、郡庁内務課長、事務課長など産業界の人であったという。10人の生徒が受講した。

鄭氏は私に、朴正熙氏は聞慶公立普通学校の教師として付設学校の身北更生農園(身北面葛坪里)で授業を行ったと証言してくれた。葛坪里は聞慶から12kmほど離れた山奥である。翌朝葛坪里龍興初等学校に到着し、金文鎬校長を訪ねた。彼の紹介で朴正熙氏に当時直接学んだキム・ソンファン氏など三人の弟子たちに会うことができた(写真1)。彼らは朴正熙教師が葛坪簡易学校で農村振興の授業科目を担当したと証言した。



写真1:韓国慶尚北道聞慶郡身北面
葛坪里でインフォーマントたちと
(1996. 3. 23、筆者撮影)

それによると簡易学校の姜光乙先生が40日間出張をした間、朴正熙先生が代講してくれたという。彼らは朴正熙先生に対する深い謝恩をもって、心

を込めて、そして真剣に情報を伝えてくれた。酒席では「農村振興歌」を歌った。毎朝ラッパを吹いておられ、清掃を徹底した人、運動が好きで学生たちとよく交わる先生、日本の人々に軽く見られてはいけなさと絶えず闘志を吹き込んだ人、貧富貴賤、分け隔てなく弟子を愛した人、酒が好きな教師、家庭訪問をたくさんして学生の父兄たちともよく交わった先生、よく走った運動靴で記憶される人、そして教師で満足する方ではなかったと話しておられた。

私は後に姜光乙先生に関する証言を裏付ける資料を見た。1935年『朝鮮』7月号の金玉鉉氏が寄稿した「慶北の農村を観る」である。

昨年以來各地に簡易學校の設立を見、簡易學校の教育が農村の實際に即する實習本位の教育であるだけに農村振興に密接な關係があるのは疑わざる事實である。簡易學校の生徒は二箇年間農家更生の實習生として訓育を受け卒業後、部落の中堅青年として更生運動の先陣を勤める、農村の福祉を築く意義ある活きた教育である。聞慶郡聞慶面身北簡易學校は邑内より北に離れた二里十八町の山奥の寒村にあるが、昭和九年五月に設立し生徒一、二年生八十二名を有し、教員は姜光乙氏、四十一歳であつた。校門に入ると一目で氣を引くのは全てが立派に整頓されて無駄な所が無いことであつた、校舎は勿論牛、豚、鶏舎、堆肥舎、肥料を貯めるところ等一区域を劃し実によく整へてゐるのみでなく、土堤の下には桑樹を植栽し、庭の隅には菓草其他蔬菜を栽培する等空地を完全に利用し、實習地も整然と区劃し作物の成長もよろしく見る者をして感心せしむる程であつた。實習地中の約一反歩は昨年中林野を開墾し熟田に化し、更に開墾をなす豫定地も約二反歩程隣接してあつた、昨年、生徒一人当實習収入高は最多十八圓五十錢、最少十一圓五十錢、平均十三圓に達し、作業の種類は部落民の田植及除草の引受け、田の稲刈、木炭運搬、刈織、縄織、草履作り、實習畓田作業、採薪、養畜、花卉栽培、蔬菜家庭作業等であつて最も多く収入を挙げたものは吹織百八十圓、木炭運搬百六十圓にして他のものと合せ總計六百二十八圓の収入を挙げ得たのである。簡易學校にして僅か一箇年を過ぎざるに斯る成績を挙げ得たる

は甚だ驚異すべきことで、之は全く教員の熱心に依るものであった³。

私はこの調査を通じて朴氏のセマウル運動が農村振興運動の体験から成し遂げられた可能性が高いという思いに至り、二つの運動を比較してセマウル運動が日本植民地期の農村振興運動をモデルにして始まったものだと主張した。



写真2：韓国慶尚北道亀尾市の
朴正熙生家生家
(2013. 7. 9、筆者撮影)

朴正熙生家を訪ねる

私の朴正熙への関心は消えることはない。2013年夏の暑さの真最中に、韓国慶尚北道龜尾市の朴正熙生家に立ち寄ってみた。7月8日金海空港に着き、高速電車のKTXに乗った。東大邱で在来線に乗り換えた。乗った列車が「セマウル号」であったのは、セマウル（新しい村）運動を調査するために行く私にとってもふさわしいといえる。セマウル運動の歴史を象徴するようなセマウル号であった。今も走ってはいるがオールドタイムの列車である。当時はセマウル運動が「新しい」運動であったが、今では「古い」歴史の一場面のように感じられる。列車のバージョンが変わるように、多くの人々も私も多様なバージョンに変わってきている。

このローカル線では車両よりは人々に昔を感じた。大きい声で慶尚道方言を話す人たちには、ほんとうに懐かしく親近感を感じた。朴正熙氏の生家へ向かって走る列車の窓から見える風景は山間地方の盆地である農村なのに、横断幕などには「先端技術の都市」という看板があって、農村風景には不釣り合いな感があった。今ではITやデジタルが主産業となり、朴正熙が誘致建設した輸出公団に勤務する家族が多く住んで地域の人口を維持し、40余万の都

市として経済的にも活性化しているという。亀尾市は朴正熙に恩恵を大きく受けているということの意味する。朴大統領は自身の生まれた故郷に輸出公団を誘致建設し、農業の他に工業都市としても有名にしたのである。最近ここで朴正熙氏を主題にしたシンポジウム（「2013 朴正熙リーダーシップセミナー」）が開かれたということからも、亀尾市は如何に朴正熙の恩恵を意識しているかが分かる。

私は風水師のように金烏山を見上げてみた。風は単純な山風ではなかった。朴大統領が金烏山の風水の精気をいただいて生まれたという俗説を、私も内心半分くらいは信じているようであった。朴正熙生家訪問の重要な目的は、風水信仰と結びついた英雄談を検証することだった（写真2）。

翌7月9日朝、亀尾市にある朴正熙大統領の生家に至るまでの道は、朴正熙に因んだ道路名に視線がいく。「朴正熙路」「セマウル路」等を通って、朴正熙生家に到着した。昔はもっと辺鄙な田舎の農村であっただろう。このような辺鄙なところから英雄が出るのだろうか。風水信仰以外に説明することができない。世俗的というならば現代の韓国では偉人や英雄は自然に生まれるのではなく、試験地獄(?)によって創られるようなものだからである。現在から考えると農村からは偉大な人物は出難い。いわば門閥を背景に持って生まれて教育ママの力による課外授業、試験競争を経て、一步一步競争戦を突き抜けて出世するのであり、こういう貧しくて寒々とした村では英雄が生まれそうにない。現在の出世行路とは違った風水説がかえって朴正熙によく似合う。このような村で、このような家で生まれ、いくら誠実さを信条にして生きたといっても英雄になることは難しい。それはあくまでも運といわざるをえない。

何より風水的に人物が出てくるという話が合うような感じがした。金烏山の麓にある藁葺きの家が視野に入ってきた。朴正熙生家に到着した。この家で朴正熙のような人が生誕したことは驚くに値する。山間地域の貧しい農村で生まれて師範学校を出て聞慶普通学校の〈先生〉になり、急転換して軍に入隊して、陸軍士官学校を卒業して、日本帝国の将校となった。日本植民地から韓国が解放され、共産主義者疑惑で刑務所に入れられて、出所して韓国の陸軍少将となり、クーデターを起し、大統領になったのである。

生家には農村出身者の出世行路が分かりやすく展示されている。朴氏の生家は素朴な感がある。生家を宮殿のような両班家のように作らなかったことは良い。訪問客は偉大な英雄とみる人が来ているのだろう。真夏の暑さの中、9時からの開館時間、館内には観覧者が少ない。私は観光客になって熱心に観覧した。電子芳名録に住所などを書いて、大統領ご夫妻の写真のそばに立って記念写真を撮った。そして直径15メートル、高さ10メートルの原形のハイパードームの中で12分間の映像スクリーンを椅子もないカーペットに座ったまま360度に広く広がる映像を見た。朴氏の業績を短く圧縮した映像が縦横に広がって内容は却って分かり難く、しかも大きさに圧倒されて、ただ偉大な人物なのだという印象を強く受けた。このドームは情報を伝えるのではなく、圧倒感を与えるような空間であると感じた。

朴正熙生家には追慕館があって拝礼ができるように開放されている。朴正熙生家にも「春窮期」（穀物が足りない端境期）の体験をする食堂がある。私は朴正熙に対する尊敬の念を持って集まる人々の態度を観察することも一つのポイントとした。朴正熙氏は軍人として軍事クーデターで政治家になった人であったが、韓国経済を発展させた「漢江の奇跡」を成し遂げた英雄であることが展示されている。

セマウル運動などの大統領の演説文と決裁文書、行政部署の新しい村事業に関する公文書、村単位の事業書類、新しい村指導者の成功事例原稿と手紙、市民の手紙、新しい村教材、関連写真と映像など約22,000件余りのセマウル運動記録物が2013年6月ユネスコで世界記憶遺産に登録されたと書かれている。

私は位牌を祀っている追慕館の前で黙祷をした。私の自分史を振り返ってみて、複雑であった。私は彼を単純に英雄として見るのではなく、彼の人生を考えて見ている。見る人によっては独裁軍人、あるいは経済開発で祖国近代化を達成させた偉大な大統領として見るだろう。

私は金日成生家を訪ねた時のことを思い出した。「朴正熙生家」と「金日成生家」は非常に似ている。しかし朴氏は金氏と決定的に異なる。金氏は独裁者として一貫し、平穩に死亡し、その一族が現在3代続いているが、朴氏は暗殺された悲劇的な人物である。しかし生家の記念展示には悲劇的な部分

が欠如している。クーデター、長期政権と人権弾圧、暗殺などは一切展示されていない。彼の人生の暗い部分は表現されていない。彼の暗い部分はなく、金氏の生家とそれほど変わりが無いものになっている。

彼の一生の一部だけが強調されている。これは総合的な資料館とは言えない。生家らしく誕生だけを強調したものに過ぎない。ただ平凡な英雄作りの記念館にすぎない。彼の悲劇的な部分は金日成生家と本質的に違う。偉大な政治家・軍人としての英雄という点を考えに入れなければならない。悲劇的な部分がカットされてはいけない。それでは単なる田舎の村おこしの施設物にすぎない。朴氏を否定的にみる人は来なかったり、背を向けたりするだろう。安重根は伊藤博文を暗殺して、死刑にされても偉大な英雄として名を残したが、金載圭は朴正熙を暗殺して死刑となり、忘れられている。同じ殺人者だが、何がこのように相反的にするのだろうか。

生家の外側には 2015 年完工予定である「セマウル運動テーマ公園」の中に朴大統領の銅像が立っている。遠くから見た朴正熙像は私のイメージとはとても掛け離れていた。銅像は実物より大きく、彼ではない。私が思うに彼は小柄な軍人であったが、銅像は長身の紳士であった。彼はこんなに長身の紳士だったろうか？ 背が伸びたのだろうか、変身したのだろうか。英雄化の濃厚なイメージアップの意図が加えられたものあり、非常に違和感を受けた。

朴大統領の生家を訪ねて朴正熙氏の人生の全体像を見ることはできなかった。彼を知る本場であると期待したのに、逆にその真実を知ることができなかった。それは先述したように悲劇性自体が英雄性なのに、この闇の部分に欠如しており、さらに変身した英雄像（？）には感動より失望を感じた。

亀尾から金海空港行き直行バスに乗った。客は私一人であった。贅沢を感じた。その車中で朴正熙生家に対して自ら感想を整理するように念入りに考えた。朴正熙氏が日本帝国の教育を受け、聞慶で教師をしながら何を考え、どんな経験を積んだのだろうか。後に革命を起こして大統領になり、農村革命を起こすに至らせたのは何だったのだろうか。

セマウル運動の源流

韓国にとって日本植民地時代は不幸な時代であるが、その時代のものが残

存するのは当然であり、それが残っているのは事実である。政治、経済、社会、文化のあらゆる面において日本文化の影響が根強く存在すると同時に、下部構造までも日帝時代の枠組み、すなわち政府行政組織、教育制度、メディアの形態、徴兵制と軍隊組織、警察組織、企業構造など、あらゆる制度と組織が日本式の枠によって作られていて、大部分が修正されずに今日まで残っている⁴。朴正熙氏が植民地時代の農村振興運動をモデルとしてセマウル運動をしたのもそれであろう⁵。私は農村振興運動とセマウル運動を比較して、セマウル運動が日本植民地期に宇垣一成が主導し、朝鮮総督府が実施した農村振興運動の影響を受けていたか否かを確認したかった⁶。

セマウル運動には様々な見解がある。セマウル運動に対しては、ある人は農漁山村住民を政府主導で行政的に統制して労働力として動員した運動、政治的な体制維持のためのものであると否定的に批判した。また多くの人々はセマウル運動のおかげで韓国が経済的に発展を成し遂げたと、肯定的に評価しもある。亀尾で開かれたシンポジウムでソウル大学校名誉教授のノファジュー氏は「1970年代のセマウル運動を社会的革新として、勤勉・自助・協同のセマウル精神の創発を社会的革新の成功と見る」と言った。

金忠男氏は『成功した大統領・失敗した大統領』で「朴正熙大統領は韓国の代表的指導者だけでなく 5000 年民族史にそびえ立った指導者の一人としていつまでも記憶されるだろう」と評価し、その主要な理由としてセマウル運動を推進して大きい成果を上げていると述べている。

私はその深層を探ってみたかった。創案者である朴正熙氏はセマウル運動の計画と実施は何を参考にしたのか考えていくうちに、朴正熙氏が軍人や政治家になる前に小学校の「先生」であったことに注目した。しかし特にセマウル運動の標語の〈自力更生〉をスローガンに始められた新しい村づくり運動は農村振興運動へ、地方改良運動へ、さらに二宮尊徳への「報徳運動」に遡る。

セマウル運動や農村振興運動は、今の日本でも「地方創生」のモデルとなり得るかも知れない。

(dgpyc081@yahoo.co.jp)

注

- 1 John E.Turner · Vicki L.Hesli · Dong Suh Bark · Hoon Yu、 *Villages Astir:Community Development, Tradition,and Change in Korea*, Praeger Pub Text,Westport, Connecticut,USA. 1993 : 11
- 2 同上 16-20
- 3 朝鮮總督府『朝鮮』昭和10年7月号:116項
- 4 문옥표 「일제식민지 문화정책」『일제의 식민지 지배와 생활상』정신문화연구원(文玉杓、「日帝の植民地文化政策」『日帝の植民地支配と生活相』韓國精神文化研究院) 1990 : 21-24
- 5 내무부 『새마을운동 10년사;자료편』(內務部、『セマウル運動 10年史:資料篇』) 1980
- 6 崔吉城 「セマウル運動と農村振興運動」『国立歴史民俗博物館研究報告』第七〇集、1997: 최길성 「새마을운동과 농촌진흥운동」『한국사논총』동방도서(崔吉城 「セマウル運動と農村振興運動」『韓國史論叢』(李炫熙還曆記念論文集) 東方圖書) 1997